

○和名さまざま (久内清孝) Kiyotaka HISAUCHI: Various common names of some plants

1) うかつにも、本誌 38 卷 2 号に *Panicum capillare* を新入國のものと思いキヌイトスカキビなる新和名を与えてしまった。その後ノートを整理していたら、1955 年に関根好次という方が既に上州館林で採集されていて、桧山庫三氏が野草 21 卷 11 号 (1955) でハナクサキビなる新名を与えていたことがわかった。更に手元をしらべたら、1959 年名古屋の上田豊氏が同市、中切で採集された標本が出てきた。したがって、この草は館林と名古屋で採集されてることになるから、いわゆる帰化品と一応認めらるべきものである。私のかいたものは、生花に用いられたものだから、野外にあったものか栽培されたものか不明である。いずれにせよ私の与えた名は余計な名称として抹殺してよいものである。

2) ナス科の植物 *Solanum seaforthianum* Andr. の和名であるが、はれが二つある。そのひとつはルリイロツルナスで、園芸大辞典 4 卷 (1953) がとっている名であるが、Walker 氏が発行した園田咲也、多和田真淳、天野鉄夫氏等が編集された沖縄植物誌 (1953) や初島住彦、天野鉄夫両氏の沖縄植物誌 (1958) には、フサナリツルナスの和名が用いられている。和名はその植物を識別するため便宜上与えられたものだからなんでもよく、一般に通るものを用いたらよいのだから、どれが正しいとか、間違っているなどという必要もないが、ここではこの植物に和名が二つあることをしるしておく。

3) チリーの国花として名高い *Lapageria rosea* Ruiz. et Pav. というユリ科の植物で、現在 Philesiaceae とい科にうつされていて日本でもまれに培養されているものがある。その和名がツバキヅルという名で呼ばれているようだが、これは、故松崎直枝氏が近世渡来園芸植物 (1934) p. 296 で、ツバキカヅラ (緋蔓) とかいでいるから、この方が命名者の意志に合致するよみ方と考えられる。

4) ガマノホモドキという名のものが滝井の園芸通信に出ていたので、種子を購入してまいてみたらよく似ているが、だいたい三通りに区別できるものが出た。しかし、その大部分は、*Pennisetum thyphoideum* L. (= *P. glaucum* R. Br.) である。この新和名は、エピセットにちなんだものであろう。なるほど穂の形状からも非常によい名と思われる所以、よく考えたものだと一応感心した。ところが、東大にはこれにトウジンキビの名が記されていて、この名は紀州有田郡広村で城本藤太郎氏が 1927 年の 11 月にとられたものであり、これが、その名で植物名鑑第 2 卷 (1905) に収録されているから、それを使ってよいのではないかと思われるのでガマノホモドキは他のものに移すのも一案と考えられる。なお三通りの形のものが現れたといったが、そのひとつは葉に微軟毛の密生しているもので、他のものは穂が太くて、おそらく結実率の低いものであるから、いろいろな雑種性のものらしい疑いももたれる。これらについては、いま私にはなにもいえない。なお、この植物をタヌキと呼ぶ花屋があるが、この名はいろいろなもの

に用いられるので、混乱を起しやすいので使いたくない。

5) シオザキソウ、別名コゴメセンジュギク。これもききなれない名で、まだあまり流布していない名である。この名は、奥山春季氏が原色日本野外植物図譜第5巻(1960)で、田中肇氏が東京江戸川区塙崎町で1957にとられたキク科の *Tagetes minuta* L. という米国の南部に産する雑草に与え、写真を同書430図版に示されたもので、シオザキとは、採集地塙崎にちなんだもので、別名の方は、庭園で古くから栽培されているセンジュギクと同属であるところからつけた名であるが、センジュギクに観賞価値があるのに、このものは、まことにつまらないものである。両者は同一属だけに葉その他に透映釣があることが *Tagetinae* というグループの特長の一つになっている。この草は1955年に三重の太田久次氏によれば四日市で同氏が採集されている。最近では、昨1963年10月に小倉市の吉岡重夫氏が門司税関附近で採集されているから、かなり帰化範囲が広くなっている。おそらく、各地にそれぞれ別々の経路でつたわったものであろう。

6) 近頃、花屋の店頭や、生花の展示場などで見かけ、その道の人達がフウセンヤナギと呼ぶものがある。すなわち、トウワタ科に属するアフリカ産のもので、広く温暖な地方で栽培されている *Gomphocarpus fruticosus* R. Br. で、園芸大辞典第2巻(1950)や、石井勇義、穂阪八郎共著の原色園芸植物図譜6巻(1959)には、ともにフウセンダマノキという名を用いているから、ここに、またフウセンヤナギなる名が、すでに園芸家が用いているフウセントウワタとともに登場したわけである。しかし、この名は、まだ活字でくまれていないが、いずれ、どこかに現われるであろう。葉がヤナギを想起させる形をしているので、わかりやすい名である。この植物は園芸大辞典によれば1936年に田中長三郎氏がインドから当時の台北帝大へ種子をつたえ、田中諭一郎氏がフウセンダマノキと命名したものだという。しかし、いつ本土に入ったか正確にわからないが、東京近郊では現在栽培され、外側に軟刺のある気球状の果実が観賞用に供されている。

7) キバナタカサブロウ この名は一般にはまだ普通でない名であるが、東京大学へ武田薬品工業会社が寄贈した標本にかいてある名で、同社の薬草園に栽培されたものであるから、同社の当事者が命名したものと考えたが、既に北陸の植物10巻 p. 3に杉本順一氏の命名として公表されていた。実物は *Guizotia abyssinica* Gass. というキク科の植物である。どこから入国したかわからないが、学名が説明しているように、エチオピヤ辺のものである。この和名はタカサブロウのような印象をあたえる名であるが、草状がそんな感じがするところもあり、総苞片が巾広い点など、ちょっと似ているが、7片内外の黄色の舌状花を有し頭花の直径は3cm内外に達する観賞価値のあるものであるから園芸品として来たものであろう。これが野外で採集された例として千葉県の柏市があつたが、最近は門司税関附近で吉岡重夫氏(1963)がとつてられる。武田薬草園のものは別として、千葉県柏市と門司税関附近のものは広い意味での帰化品であろう。

8) クワの一種にロソウ、別名としてログワ、マルグワ、モチグワの名があり、その

変わりものに生花の人達がウンリウとよぶものが近頃流行している。ウンリウという名は使いやすいと見え、いろいろなものにこの名がある。これには柔学の専門家堀田禎吉氏が札幌博物学会誌19巻(1963)ならびに植物分類地理14巻(1952)p.105に, *Morus latifolia* Poir. f. *spirata* Hotta の名を与えたとき、ウネリグワ、キウリウの和名を並記している。また別に宮沢文吾氏は観賞植物図説(1960)にこれを図説し、*Morus multicaulis* Perrott var. *distorta* の新名を与えた; コウテングワの和名を記録された。また、杉本順一氏は日本樹木検索誌(1961)にタイヘイグワという名を拾っている。学名の方は命名規約によりおのずから解決できるからよいが、和名となるとそれらをおぼえておかないと困ることがある。それにしても、ロソウ、ログワ、マルグワ、モチグワなどの名を持つ種類の変りものに相当するのに、ウンリウは別として、ウネリグワ、タイヘイグワ、キウリウ、コウテングワの名があることを記しておく。

9) オオホナガアヲゲイトウ これは、いまここで提唱する新名で、それは私が *Amaranthus palmeri* Wats. と同定するものに与えたものである。もし私の同定が正しいとすれば、それは、北米西部のもので米国各處で、鉄道線路や路傍にあるといふ。この草は現在わが国にいたるところで見られるホソアオゲイトウに似たものであるが頂穂が太く、1-3 dmにも達するもので、苞片は針爪状で、乾けば外方に反り返っている。本品は雌雄異株で、私の入手したものは雌本であつて吉岡重夫氏が、門司税関附近で採集されたものである。雄本の存否については不明であるが、もし雌本だけならこの年限りのものであるが、まさかそんなこともあるまい。

(東邦大学薬学部)

○ 植物門の和名について (木村 陽二郎) Yojiro KIMURA: On the Japanese names of plant-phyla

昨年10月2日、岡山での植物学会大会で「植物の体系と系統」と題して講演したが、そのときに全植物を16の門に分類し、各門の和名は次に記すようにした。簡単にするために次の各群の和名のあとに記す植物門、植物、門、または類などの語はここでははぶいて記す。

1. 細菌 Bacteriophyta	2. 藍藻 Cyanophyta
3. 炎藻 Pyrrrophyta	4. 黄藻 Chrysophyta
5. 褐藻 Phaeophyta	6. 藻菌 Phycomycophyta
7. 古菌 Archimycophyta	8. 粒菌 Myxomycophyta
9. 真菌 Eumycophyta	10. 紅藻 Rhodophyta
11. 緑虫 Euglenophyta	12. 緑藻 Chlorophyta
13. 輪藻 Gharophyta	14. 蕨苔 Bryophyta
15. 羊齒 Pteridophyta	16. 種子 Spermophyta

このようにすべて二字に統一してみたのであるが、炎藻、黄藻はすこし目新しくて果して一般に受けいれられるであろうか。藻の字は当用漢字にないのが私には不満である。藍藻、蕨苔も当用漢字にないが、これを青藻はまだよいとしても、鮮台で代用したくはない。シダ、コケはよく使われているが、これも統一のためにここでは用いなかつた。なお、学会での講演は英文論文として整備し、木村有香博士記念論文集(東北大學紀要)に寄稿した。

(東京大学教養学部)